福岡教育大学紀要，第59号，第１分冊，29―37（2010）

『老人と海』における老人の孤独の世界
―原作と映画の比較鑑賞―

The Old Man's Solitary World in *The Old Man and the Sea*: A Comparative Appreciation of the Original Novel and the Movie

古　賀　元　章　　山　本　一　夫

Motoaki KOGA　　Kazuo YAMAMOTO

英語教育講座　　北九州工業高専

（平成21年９月30日受理）

はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）は，1952年に『老人と海』（*The Old Man and the Sea*）を出版して，翌年にジャーナリズム・文学・音楽の分野で与えられるアメリカのピュリッツァー賞を受賞し，翌々年にノーベル文学賞も受賞している。そこで，この小説の世界的な高い評価がこれらの受賞の一因であると言われている。

当のヘミングウェイは，ジョージ・プリンプトン（George Plimpton）とのインタビューで，『老人と海』の執筆の狙いについて次のように述べている。

> First I have tried to eliminate everything unnecessary to conveying experience to the reader so that after he or she has read something it will become a part of his or her experience and seem actually to have happened. This is very hard to do and I've worked at it very hard. (Plimpton 236)

ヘミングウェイの発言が示すように，この小説は，読者が鑑賞する場面に専ら集中し，その場面を自分の経験として感じさせるように工夫されている。こうした工夫は，当然，読者がそれぞれの好みに従ってこの小説の内容に感銘を受けるための作者側の意図であると言える。

原作で注目されるのは，主人公のサンチャゴ（Santiago）老漁夫が，妻に先立たれた独り身で，周囲の人々との交わりが少なく，ひたすら魚を釣ることだけを生きがいとしていることである。したがって，原作の鑑賞では，そうした彼の孤独の世界の描写に焦点を当て，その結果としてどのような読後感が考えられるのかを検討したい。

『老人と海』は，1958年にジョン・スタージェス（John Sturges）監督によって映画化されている。彼は50年代から60年代にかけて，『OK牧場の決斗』（*Gunfight at the O. K. Corral*, 1957），『荒野の七人』（*The Magnificent Seven*, 1960），『大脱走』（*The Great Escape*, 1963）といった作品を手がけているが，いずれの作品も，明快で緊迫したストーリーの展開と男らしい痛快なアクションシーンによって，人々から高い評価を得ている。映画の『老人と海』は，これら三つの映画作品と比べて登場人物が極端に少なく，しかも物語の大半を舟の上で老人が繰り広げる魚との死闘だけに限定している。しかし，そうした特色がかえって老人の人物造形を強烈に浮き立たせるので，観客は彼の言動を中心とした場面に最後まで飽くことなく深く感動するであろう。そこで映画の鑑賞では，当時，脂の乗ったスタージェス監督が，原作を十分に理解した上で行った周到な演出によって，老人の孤独の世界がどのように映像化されているのかを考察したい。

以上の論述から判断して，原作と映画は共に，魚を釣るという目標に向かって生きる老人の一途な姿を伝

えている。本稿は，その一途な姿が映し出される彼の孤独の世界がわれわれに，物語の感動ばかりではなく，忍耐強く生きる勇気を与えてくれることを明らかにしたい。

1．原作の鑑賞

1．1　孤独の世界の提示

『老人と海』の冒頭は，サンチャゴ老漁夫の現状を紹介する。彼は，メキシコ湾流に舟を浮かべていたが，今日までの84日間一匹の魚も釣れない。マノーリン（Manolin）少年が，最初の40日間は舟の上で彼と一緒に生活していたが，とうとう両親の言いつけで別の船に乗り込み，最初の１週間で三匹の魚を釣り上げている。陸では，少年が舟の漁具の後片づけを手伝う。漁具の中でも帆について，“The sail was patched with flour sacks and, furled, it looked like the flag of permanent defeat.”（９）[1]と描かれている。この描写は読者に，魚を追い求める老人の人生の「永遠の敗北」を印象づけようとする。しかし，“Everything about him was old except his eyes and they were the same color as the sea and were cheerful and undefeated.”（10）からわかるように，老齢とはいえ，彼の精神はまだ不屈である。その精神が彼の日々の生活の原動力となっているのである。

今日も不漁で陸に上がった老人は，少年からビールをおごってもらうために，二人でテラス亭（the Terrace）へ行く。そこでは，他の漁師が話しかけるが，老人は相手にしない。やがて老人は，少年を連れて自分の小屋へ戻るが，慕ってくれる彼に対してだけ心を開くのである。ここで，二人の間で交わされるプロ野球の話の一部を引用してみよう。

> “Tell me about the baseball,” the boy asked him.
> “In the American League it is the Yankees as I said,” the old man said happily.
> “They lost today,” the boy told him.
> “That means nothing. The great DiMaggio is himself again.”
> “They have other men on the team.”
> “Naturally. But he makes the difference. In the other league, between Brooklyn and Philadelphia I must take Brooklyn. But then I think of Dick Sisler and those great drives in the old park.”
> “There was nothing ever like them. He hits the longest ball I have ever seen.”（21）

老人がむきになって話をするのは，プロ野球でひいきにする選手たちである。そこには，選手たちが試合でぜひ活躍してもらいたいという彼の期待感が込められている。それは，彼が自分を鼓舞して，魚を釣ることを決して諦めない気持ちの表れでもある。

少年が家へ帰った後に，老人は小屋で少年時代のアフリカについて次のように夢見る。

> He no longer dreamed of storms, nor of women, nor of great occurrences, nor of great fish, nor fights, nor contests of strength, nor of his wife.（25）

彼の夢の中で無縁なのは，暴風雨，女性，大きな事件，大魚，争い，力比べ，亡き妻である。これらは，現実の人生での苦悩と何らかの関係がありそうな事柄ばかりだと言える。そこで，彼が夢見る行為は，不漁が長く続く現実を癒やしてくる作用となっているのである。

このようにして，『老人と海』は，世俗の世界とは一線を引いた，老人の孤独の世界を描いている。この孤独な世界は，世俗の世界から彼を慕う少年だけを受け入れ，来る日も来る日も魚を執拗に追い求める彼の不屈の精神と，その精神を和らげるプロ野球やアフリカの夢とによって成り立っているのである。

1．2　孤独の世界と海の自然界との闘い

夜明け前の暗がりの中で，老人は少年の励ましの言葉を受けて船出する。漁師たちから大井戸と呼ばれる場所では，小えびや餌魚やヤリイカが観察される。その後彼は，飛魚，軍艦鳥，しいらの大群，大きな海亀，赤く漂う浮遊生物を見かける。これは，彼の孤独の世界が海の自然界に触れ合う光景である。この触れ合い

が，いわば嵐の前の静けさを与えているのである。

舟が沖まで来ると，老人は海中の綱の引きを感じる。その場面が次のように書かれている。

> He felt the light delicate pulling and then a harder pull when a sardine's head must have been more difficult to break from the hook. Then there was nothing.
>
> "Come on," the old man said aloud. "Make another turn. Just smell them. Aren't they lovely? Eat them good now and then there is the tuna. Hard and cold and lovely. Don't be shy, fish. Eat them." (42)

彼は海中の100尋の深さで，一匹の大物のマカジキが餌となっているイワシの群れに食らいつくのを直感する。彼の言動は，ついに大魚と遭遇した興奮を生き生きと伝えている。

老人は大魚のマカジキを捕ろうとするし，マカジキは彼から捕られまいとする。こうして，両者の闘いが始まる。言い換えれば，彼の孤独の世界と海の自然界との闘いが始まるのである。

ここで，両者のその後の死闘を考察することにする。しばらくして，綱を握る老人は大魚の重みの手応えを感じるし，大魚に舟を引かれていることも感じる。この状態が昼頃から4時間も続くのである。彼は寂しさのあまり，"I wish I had the boy. To help me and to see this." (48) と口に出したり，自分の餌に食らいついている大魚の気持ちを考えたりする。

老人とマカジキがこのまま対峙した状態が翌日まで持ち越されることになる。彼はこの大魚に向かって，"I love you and respect you very much. But I will kill you dead before this day ends." (54) と話しかける一方で，この大魚に対する彼の気持ちが，"I wish I could feed the fish, he thought. He is my brother. But I must kill him and keep strong to do it." (59) と表現されている。その間に，彼は少年がそばにいて仕事や左手の傷の治療を手伝ってくれたらと思うこともある。

次の日になると，マカジキが舟のまわりを泳ぎ始めて3度目に，老人はこの大魚の姿をついに認める。マカジキがさらに3度目に近寄ったとき，彼は残った全身の力を込めて銛をこの大魚の心臓に突き刺す。その結果，死んで海面に仰向けに浮かんだマカジキが舟にくくりつけられる。

『老人と海』は，"The hands have done their work and we sail well. With his mouth shut and his tail straight up and down we sail like brothers." (99) と描いて，兄弟のようになった老人とマカジキを港に帰らせようとする。港への帰路の航海は順調であったが，当然のことながら，マカジキの体内から海中へ流れた血の匂いを嗅ぎつけて，一匹のサメが後から執拗につけて来る。やがて，サメが襲いかかり大魚の皮と肉を引き裂くと，老人は相手の顎の下にある脳みそに銛を突き刺す。サメから身を食いちぎられた大魚の痛みは同時に自分自身の痛みでもあると，彼は感じるようになる。彼の胸中に見られるのは，相手に対し闘う決意と敵意である。

痛手を負ったサメが死んで海中に沈み，約2時間が経過した後に，老人は近くで別の二匹のサメがいることに気づく。そのうちの一匹が舟の下にもぐりマカジキを襲ったとき，彼はナイフで相手の目を突き刺し殺してしまう。もう一匹が襲撃すると，彼は目を刺し，さらに脊髄と脳の間も刺して，相手の息の根を止める。しかし，これら二匹のサメによって大魚の4分の1が食べられてしまう結果となる。

老人が予期した通り，またサメが舟に近寄って来る。今度は一匹が大きな口を開けてマカジキに食いついたとき，彼はオールの先に取り付けたナイフで，この侵入者の脳天をめがけて打ちおろす。サメは，ナイフが刺さったまま，海中に沈んでいく。日没になる少し前に，ガラノスという種類のサメが二匹並んで近づいて来る。最初のガラノスが大魚の横腹に噛みついた瞬間，彼は相手の頭をこん棒で強く打つ。二番目のガラノスが顎を大きく開けて大魚に襲ったとき，彼は相手の後頭部をこん棒で思い切り強く叩く。これらのサメが再びやって来ることはなかったが，大魚の半分は無くなるのである。

日が完全に沈んで真夜中近くになると，別のサメが群をなして押し寄せて来る。老人は，マカジキの肉を食いちぎる顎の音や舟を揺らす音を頼りにして，相手に勘でこん棒を振り回す。こん棒を奪われると，彼は舵の柄で相手を打ち続ける。しかし，侵入者たちは次から次へと獲物の肉を食いちぎってしまう。そのうちの一匹が獲物の頭に食いついたが，彼の舵の柄で力一杯叩かれて，ようやくその頭から離れる。

夜中過ぎにさらに別のサメが襲ったが，老人はそのことに注意を払わずに，くくりつけられたマカジキの大半が食べられて身軽になった舟をどんどん港へ進める。浜沿いに立ち並ぶ村の灯りが見えるようになると，

彼の心境は次のように描かれている。

> The wind is our friend, anyway, he thought. Then he added, sometimes. And the great sea with our friends and our enemies. And bed, he thought. Bed is my friend. Just bed, he thought. Bed will be a great thing. It is easy when you are beaten, he thought. I never knew how easy it was. And what beat you, he thought.
> "Nothing," he said aloud. "I went out too far." (120)

老人とサメたちとの闘いは終わる。捕ったマカジキに残されているのは，背骨と尖ったくちばしのある頭部の骨だけである。彼はすっきりした気持ちになって自分の漁を振り返っている。さまざまな生き物が生息する海は，時には魚釣りのための敵にもなり，時には愛する友だちにもなるという二面性に，彼は気づくのである。したがって，今の彼は，何が何でも大魚を捕るという執着心が無くなり，漁の結果がどうであれ，目の前の現実を素直に受け入れているのである。

魚を釣ることが老人の孤独の世界を占有している。そこで，彼が大魚のマカジキと格闘するのは，この孤独の世界が海の自然界と闘うことを意味する。彼によって釣り上げられた大魚はこの孤独の世界の一員となるのである。今度は大魚の体内から海へ流れる血の匂いを嗅いで，サメがこの獲物を代わる代わる襲って来る。この獲物をめぐって，彼の孤独の世界と海の自然界との新たな闘いが開始される。その結果，彼は海が友だちであると同時に敵であるという二面性を知らされ，サメの来襲に一喜一憂しない心境になる。そこには，海での現実の二面性（友だちと敵）を理解した漁師としての成長が認められよう。

1．3　孤独の世界と港への帰還

無事に寄港した老人は，舟から取り外したマストを肩にかかえて，途中倒れながらも何とか立ち上がって自分の小屋に帰り着き眠りにつくのである。朝，ここを訪れた少年は，彼の痛々しい姿を見て大声で泣き続けた後に，テラス亭からコーヒーの入った缶を持って舞い戻る。そのとき，二人の交流の場面が次のように見られる。

> The old man took it and drank it.
> "They beat me, Manolin," he said. "They truly beat me."
> "*He* didn't beat you. Not the fish."
> "No. Truly. It was afterwards."
> "Pedrico is looking after the skiff and the gear. What do you want done with the head?"
> "Let Pedrico chop it up to use in fish traps."
> "And the spear?"
> "You keep it if you want it."
> "I want it," the boy said. "Now we must make our plans about the other things."
> "Did they search for me?"
> "Of course. With coast guard and with planes."
> "The ocean is very big and a skiff is small and hard to see," the old man said. He noticed how pleasant it was to have someone to talk to instead of speaking only to himself and to the sea. "I missed you," he said. (124)

少年は，疲労困憊した老人にいたわりの言葉をかけながら，世俗の世界（漁師ペドリコによる舟と道具の後始末，沿岸警備隊と飛行機による捜索）の情報を知らせる。この情報から察して，少年や漁師たちは行方不明であった老人を大変心配していたことがうかがわれる。老人の孤独の世界は，当たり前のことながら，世俗の世界とのかかわりなしでは存在していなかったのである。その点で，"I missed you" は，後者の世界を伝達する無垢な少年の有り難さを改めて知る老人の心からの感謝の言葉である。その言葉には，漁師としての成長の別の一面をうかがうことができよう。少年の方は彼を心から敬愛しているので，二人は相互依存の関係にある。

この小説は次のような場面で締めくくられている。

> Up the road, in his shack, the old man was sleeping again. He was still sleeping on his face and the boy was sitting by him watching him. The old man was dreaming about the lions. (127)

港へ戻って来た老人は，小屋でもう一度眠りについている。その眠りは，信頼する少年がそばにいるので，漁の疲れを癒やしてくれることであろう。

その眠りの内容は，出漁前の場合と同じくライオンの夢である。ここで，老人のその行為を再考してみたい。海でマカジキと勝つか負けるかの格闘をするとき，彼は次のようにつぶやいている。

> "I'll kill him though," he said. "In all his greatness and his glory."
> Although it is unjust, he thought. But I will show him what a man can do and what a man endures.
> "I told the boy I was a strange old man," he said. "Now is when I must prove it."
> The thousand times that he had proved it meant nothing. Now he was proving it again. Each time was a new time and he never thought about the past when he was doing it. (66)

彼は，世俗の世界との接触を遠ざける変わった老人であることを自覚している。それは，自分自身の孤独の世界を堅持して，魚を釣ろうとするためである。その行為は，過去に縛られないで，いつも〈今〉なのである。この〈今〉が重要なので（Harada 274, 276），彼は毎日飽きずに魚を釣ろうとする。したがって，上の引用文で彼がライオンを夢見るのは，目が覚めたら，再び出漁する自分を鼓舞する行為であろう。

『老人と海』においては，年老いてもなお魚を捕ろうとする主人公のひたむきな姿に，読者は感動せずにはいられないように思われる。Burhans によれば，ヘミングウェイは，新しい道徳的価値を展開しているのではなく，人間の一番古い価値（勇気，愛，謙譲，孤独，相互依存）を再び断言している（454）。老人のひたむきな姿に深くかかわる人間の一番古い価値の要素をもう少し詳説すれば，魚との勇気ある格闘，生き物や少年への愛，自分の行為を美化しない態度，孤独な人生，少年との相互依存であろう。この小説が描く老人の孤独の世界は読者に，これらの要素を改めて再確認させてくれるのである。そのことが，この小説に対する高い評価の一因となったばかりではなく，ヘミングウェイのピュリッツァー賞やノーベル文学賞の受賞へとつながったと言えよう。

2．映画の鑑賞

2．1　老人と「陸での孤独な世界」

映画では，老人役の名優スペンサー・トレーシー（Spencer Tracy）が，舟の上で大魚と死闘を展開したり，この大魚をめぐってサメと再び死闘を繰り返したりする。これらの闘いの間に時々刻々と変化する老人の心情と状況が，原作の文章をほとんど忠実に採用したナレーションによって的確に表現されている。そのため，ナレーションや老人の言動だけに観客の目は向きがちであるが，映画の最初と最後に登場する少年役のフェリペ・パゾス（Felipe Pazos）の演技も，老人の演技を引き立てて深い印象を与えてくれる。

陸の上で老人と少年が一連の会話をする二つのシーンがある。一つは，出漁前の老人が少年からいろいろと世話をやいてもらっている心休まる状況である。この状況は，老人がこれから体験する海上での荒々しい闘いの場面へと移行する前奏曲の役割を果たしている。今一つは，出漁から 4 日後，骨だけになった大魚と共に帰港した老人に，少年が親身になって接する再会の光景である。この光景が観客に心暖まる感動を与えてくれて，映画はいわばハッピー・エンディングを迎える。

まず，出漁前の老人と少年の場面を見てみよう。老人は今では，妻を亡くしてみすぼらしい小屋に住み，日々の食事にさえ困る不規則な生活を一人で送っている。海の仕事でしか生きられない彼は，今日まで84日間一匹も魚を釣ることができなくても，若い漁師たちからのからかいに傷つき怒ることもなく，超然とした孤独の世界に安住している。こうした孤独な老人を和ませてくれるのは，彼の身のまわりの世話をしてくれるマノーリン少年である。少年は，原作と同様に，老人の世界と村の世界とを橋渡しする存在であると言え

る。彼は老人に，ビールをおごってあげたり，餌のイワシを調達してあげたり，プロ野球の記事が載っている新聞を持って来てあげたりする。老人の方もこうした少年の優しい行為を受け入れている。老人から幼いときに釣りを教わったことで，少年は彼に対して単なる師弟関係以上の感情を抱いている。少年は，本当は老人と一緒に釣りに出かけたかったが，彼の舟に乗っていても魚を釣ることが期待できないために，両親の命令により別の舟で働いているのである。少年が持って来た夕食を「いらない」[2] と言う老人に，少年は「食べずに働いたら駄目だよ」と注意する場面がある。また，楽しそうにプロ野球の話をする老人に，少年は熱心に聞き入っている場面もある。少年の老人に対する態度を観て，われわれは，母親が幼い子供に世話を焼いているような感じさえ受けるかもしれない。

翌日の漁に備えて，毛布にくるまってすぐに寝入った老人は夢を見る。夢に出て来るのは，嵐や釣った魚や妻ではなく，長々と続く金色の海岸と目にしみるような白い海岸，そこで子猫のようにじゃれついて遊ぶ子供のライオンたちの姿である。彼は，自分の若い頃の溌剌とした時期を幸せそうに夢の中で思い浮かべている。老人は，少年との接触を除いて，陸の上では孤独であるが，今の自分の生活に絶望しているわけではない。彼は確固たる生きがいを持っている。それは海に出て魚を釣ることである。たとえ魚が釣れなくても，それは運が悪いだけであって，彼はまったく悲観した様子を見せない。観客は，目標に向かってひたむきに生きる老人の状況がどのように展開するのかを期待しつつ，スクリーンに引きつけられていくのである。

2．2　老人と「海での孤独な世界」

夜明け前の暗闇の中を少年に見送られ，老人は1日分の水が入った瓶だけを持って，いつものように海上へと舟をすべらせる。舟の上でも文字通り孤独なので，彼は自分のまわりに現れる生き物たちの動きに対して敏感である。たとえば，アジサシは頭上で餌を捜しながら飛び回るが，なかなか餌にありつけない。このとき，「荒々しい海に生きるのになんと繊細な生物なんだ」「海は美しくもあり残酷でもある」と彼は思う。このようなアジサシの様子は，まさに魚を釣ることのできない自分自身の現在の様子の投影でもある。しかし，84日間も釣れないという現状はただ運がないだけであり，今日こそは運が戻ると確信しているので，老人は魚を求めて無心に釣り綱を垂れているのである。

老人は，舟の上で足かけ3日余りに及ぶ魚との死闘の中で，二つの大きな闘いを経験する。それは，大魚との緊迫感に溢れた壮絶な闘いと，襲いかかって来るサメから仕留めた大魚を死守しようとする闘いである。映画では，原作と同様に，これら二つのシーンが観客を最もハラハラドキドキさせる役割を果たしている。そこで，これら二つのシーンを順番に観ていきたい。

出漁して夜が明け，昼近くになったとき，老人は釣り糸への強い引きを突然感じる。彼はこれまでに出会ったことのないような大魚を実感する。ここから両者の2日間にわたる死闘が始まる。老人はどんな大魚であろうと，しばらくすれば弱って釣り上げることができるだろうと楽観視していたが，4時間経っても半日経ってもその魚は海面に浮き上がる気配がない。逆に舟は，大魚の力でぐいぐいと引っ張られて，ハバナの灯が見えないほど遠くの沖合へと向かって行くのである。

一本の釣り綱でつながった老人と大魚は，生きるか死ぬかの緊迫した関係にある。このような関係の中で，いろいろなエピソードが散りばめられていて，観客はそれらの一つひとつにいつのまにか引き込まれていくのである。その一例を取り上げてみたい。大魚の強い引きによって老人は倒され，手のひらの皮が破れて出血をする。原作では，血が糸のように尾を引いて流れていくさまが描かれている。これは後に捕らえられ舟の横に縛られた大魚から流れ出した血の匂いを嗅いだサメたちが襲って来る場面を連想させるが，この場面は映画では描かれていない。老人は，強い引きを持ちこたえようとして左手にけいれんを起こす。しかし彼は，体力をつけるために，右手でびんながをさばいて食べる。観客は哀れを催す彼のふるまいに目を釘付けになるであろう。

大魚が海面に巨大な姿を突然現す。老人は，その体長が舟よりも長いことに驚いて緊張感に包まれ，「あの子がいたらなあ」「あの子がいれば手伝ってくれるのに」とつぶやく。自分自身を励ますために，屈強の男盛りだった頃に経験したカサブランカでの出来事を回想する。それは，最強の黒人と一昼夜に及ぶ腕相撲をして，最後には勝利を収めたことである。このエピソードは原作にも描かれているが，映画では，リズミカルな音楽を背景に，この勝負で大もうけをしようするまわりの男たちの一喜一憂する表情と，腕相撲で激しく対決する若き日の老人と黒人のむきになった表情が，コミカルでユーモラスな雰囲気を醸し出している。こうした雰囲気は，これから大魚と闘う前の老人の心境を伝える映画の演出としては非常に印象に残るシー

ンとなっているのである。

２日目の夜になり，まだ一睡もしていない老人は，釣り綱を握ったまま眠ろうとするが，しばらくすると手をグイと引かれて目を覚ます。大魚が海面に近づいて来たのである。ここでも，老人は「あの子がいたら助かるんだが」「あの子がいたらなあ」と繰り返しつぶやく。やがて出漁して３日目の朝が明けると，大魚も疲れてきたのか，いよいよ舟のまわりをゆっくりと泳ぎ始める。骨の髄まで疲れきった老人は「ここまで来て負けちゃおれん。相手にとって不足はない。神様，頑張ります。天にましますわれらの父よ。100回祈ります。今は唱えないけど，唱えたと思ってあとで唱えます」と語り，大魚との最後の闘いに挑むのである。

大魚が舟のまわりで暴れまわる映像は，他の場所で実際の大魚を撮影したものを合成したシーンであるが，当時としてはそれなりの迫力を感じさせる。しかし，老人が銛を大魚の心臓目がけて突き刺し，大魚が死んで仰向けに浮かぶ場面は，大魚が作り物であることが歴然とわかり，貧弱な印象を受けて興ざめするかもしれない。舟の上の老人のシーンはほとんど撮影スタジオ内に設けた巨大な水槽で撮影されたものであるが，1950年代当時の撮影技術では致し方ないとも言える。そこで観客は，これらの場面の印象よりも，生死を賭けた大魚との闘いに挑む一人の老人を見事に演じきっているスペンサー・トレーシーの迫真の演技に引きつけられていくであろう。

老人は，大魚を舟の横腹に縛りつけ，「今や二人は航海の道連れだ」とつぶやき，貿易風に乗って順調に航海を続ける。しかし，大魚の新鮮な血の匂いを嗅ぎつけたサメたちは容赦なく大魚に襲いかかる。原作では５回もサメの襲撃が繰り返し描かれている。映画では，それを３回に抑えているが，原作と同じように，次々と襲うサメと闘う武器（銛，オールにくくりつけたナイフ，こん棒）が無くなったり，その間に大魚が骨だけの無残な姿に変貌したりする。

サメと格闘しながら大魚が徐々に食いちぎられていく中で，「老人は半身だけ残った魚を見なかった。魚と一緒に彼自身もやられたのだ」というナレーションが入る。老人は自分自身と大魚を重ね合わせている。彼は，無残な肉塊をさらす大魚に向かって語りかける。それは，１回目と２回目にサメが襲来したときの「悪かったな」（I'm sorry, Fish）という言葉であり，３回目にサメが襲来したときの「すまん」（I'm sorry, Fish）という言葉である。確かにサメから大魚を守ることはできなかったが，「負けがどうした。何に負けた？ 遠くへ行きすぎただけだ。人間は負けない。破滅はするが負けはしない」と語る老人は敗北者ではない。大魚はたとえ骨だけになっても存在しており，その大魚と共に帰還した老人もまた強い存在感を示している。

２．３　「陸での孤独の世界」の再開

大魚やサメとの死闘を経て，老人は出港から４日後の夜半にやっと戻って来る。彼は，サメに食い尽くされて骨だけの姿になった大魚と，生死の運命を共にした舟を見つめるが，すでに疲労の極限を越えている状態である。それは，小屋に辿り着くまでに途中で５回も休んだことでわかる。朝，老人の小屋へ走って行った少年は，彼の痛んだ左手を見て涙したり，彼にそっと毛布を掛けてやったりする。その後，泣き続けながらテラス亭にコーヒーを取りに行った少年に，店の主人は「デカい魚だ。あんなのは見たことない」「酒はいいのか？」「残念だと伝えてくれ」と言葉をかける。

再び小屋へ戻った少年がコーヒーを注いでいるとき，横になっていた老人が目覚める。この後に続く次のような二人の会話は観客を，「闘いの世界」からいわば「癒しの世界」へと導く効果が感じられる。

老人：やられちまったよ，今度は。
少年：魚にやられたんじゃないよ。疲れた？
　　（老人はうなずく）
少年：今度は連れてってね。
老人：駄目だ。運のない男だ。
少年：僕がツキを持ってくるよ。
老人：でも父さんが。
少年：かまうもんか。
老人：いつもモリを舟に置いておかなくちゃ。尖ったやつだ。焼きが入っていないとすぐ折れる。
少年：別のナイフもね。この風は何日吹く？

老人：3日か，もっとだ。
少年：みんなそろえるよ。それまでに手を治して。
老人：2日もすれば治るさ。方法がある。夜中に変なものを吐いた。何か胸の中で折れたらしい。
少年：それも治して。食べ物を持ってくる。
老人：新聞も頼むよ。わしが留守の間の。
少年：うん。
（少年は外へ出ていく）

少年は，以前のように老人と一緒に釣りに出ることを強く望んでいる。老人は，最初はとまどいながらも，彼の申し出を快く受け入れ，痛んだ体を治して再び漁師の生活へ戻るつもりである。和やかな二人の会話を聞いて，観客は海での老人の死闘の光景を観て高まっていた緊張感を癒されるであろう。

老人は，港に辿り着く直前，「人間は負けない。破滅はするが，負けはしない」とつぶやく。このつぶやきが示唆するように，彼にとって，時々の漁の結果に一喜一憂するのではなく，漁師の生活を全うすること，つまり，日々魚を釣ろうと漁に出かけられることが，人生の生きがいである。結果的に魚が釣れようが釣れまいが，それはその時の運であり，実は大したことではない。彼は舟の上でさまざまな肉体的な苦痛に耐えながら強い勇気と信念で闘い抜き，大魚と共に無事に寄港した。その体験によって，彼は出漁前よりも人間としてさらに成長したと言えるであろう。

映画の最後のシーンでは，再びうつ伏せに寝入ってしまい，海辺でライオンたちがたわむれている夢を見ている老人を，ロッキング・チェアーに座った少年が優しい眼差しで見守っている。原作と同様に，老人はこれからも釣りに出かけるであろうし，その都度少年は彼を励まして送り出すであろう。老人は少年の姿に若き日の自分を投影しているのかもしれないし，少年は老人の姿に未来の自分の姿を思い描いているのかもしれない。二人の変わらない友情を想像して，映画を鑑賞した後の観客の大半は物語の感動と生きる勇気を与えられるであろう。

おわりに

映画は，原作の持つ壮大な海の情景や老人と大魚の格闘シーンなどを，当時の貧弱な合成撮影技術では十分に表現できなかったに違いない。しかし，原作にこれほど忠実に映画化された『老人と海』は見られないであろう。それは，原作自体が映画的な要素（短いセリフの繰り返し，テンポの速さ，歯切れの良い物語の進行）を多く含んでいるからである。

原作は読者の想像力を働かせて物語の内容を鑑賞させるであろうし，映画は観客に視覚的に物語の進行を鑑賞させるであろう。とはいえ，原作と映画が共通して描き出しているのは，平凡な毎日を忍耐強く生きる老人の真摯な姿である。この真摯な姿こそが，今日に至るまで読者や観客の心を揺り動かして，『老人と海』という作品を傑作として印象づける大きな要因であると言えよう。

注

1．原作からの引用はすべてScribner社の *The Old Man and the Sea* による。括弧内の数字は原作の頁を表す。
2．本稿で言及する映画はワーナーエンターテイメントジャパン株式会社が販売する『老人と海』（DVD）である。引用は宍戸 正氏の字幕の翻訳による。

引用文献

Burhans, Clinton S. Jr. "*The Old Man and the Sea*: Hemingway's Tragic Vision of Man." *American Literature* 31.4 (Jan. 1960): 446-55.

Harada, Keiichi (原田敬一). "The Marlin and the Shark: A Note on *The Old Man and the Sea*." *Hemingway and His Critics: An International Anthology*. 1961. Ed. Carlos Baker. 3rd ed. New York: Hill and Wang, 1961. 269-76.

Hemingway, Ernest. *The Old Man and the Sea*. New York: Scribner, 1952. London: Jonathan Cape, 1952. New York: Scribner, 2003.

Plimpton, George, ed. "Ernest Hemingway." *Writers at Work: The Paris Review Interviews*. 2nd Series. New York: Viking P, 1963. London: Secker and Warburg, 1963. 1977. Harmondsworth: Penguin Books, 1979. 8 series. 1958-88. 215-39.

『老人と海』(DVD). 東京：ワーナーエンターテイメントジャパン株式会社, 2005.